



発行：NPO 法人岡崎がくどうの会

【TEL&FAX】0564-32-0325

【E-Mail】okazakigakudou@yahoo.co.jp

【筧 由衣さん（あおぞらクラブ 常勤専任指導員）】

実践講座6 『高学年をふくむ学童保育の生活』

講座6の高学年をふくむ学童保育の生活を受講しました。実践講座のため、報告者の実践記録をもとに助言者の先生のお話を聞いたり、グループワークに参加しました。

当時6年生だった女の子と1つの出来事をきっかけに半年にわたり、関係修復をすることができなかったことがある…と報告者の山本さん。高学年と指導員がもめてしまう、上手に関係を築くことの難しさや高学年の難しさと、山本さんの葛藤が盛り込まれた実践記録でした。

講座の中で、子どもをとらえる基本として、子どもがいる空間があり、周りに人がいるだけでは「生活」があるとは言えない、子どもたちひとりひとりの「いのち」の表現や活動があるからこそ、生活が存在する、指導員は子どもの意識と感情にいつも触れている、と助言者の先生のお言葉がありました。少し午前中の全体会と似ているような内容の講義で、子どもたちが学童保育で喜怒哀楽を一生懸命に出しているからこそ、子どもたちの「生活」が成り立っていて、その言動の裏側にある子どもたちの心や本当の思い（願い）に気づいていけるように、明日からも頑張ろうと思える講座でした。

【米本 美紀さん（たけのこクラブ 常勤専任指導員）】

実践講座7 『保護者に生活を伝え、考え合う』

ある学童保育所での実践記録からグループワークで意見を出し合い、発表する流れでした。実践記録の中で一番同感した内容は、子ども同士のトラブルをどこまで保護者に伝えるべきか？保護者が学童保育での生活を知りたいのは当たり前のことですし、子どもの生活を伝えることにより保護者と指導員との信頼関係が生まれます。でも子どもと指導員の信頼関係も大切で、時には子どもから「お迎えで今日の事言わないで」と頼まれた言葉に指導員は考えます。伝えておくべき内容か？今回は伝えないでいい内容か？指導員も保護者に対して苦手意識があると、どうしても会話を遠ざけてしまいその結果、保護者（父親）から不信感を抱かせてしまい、信頼関係を築けなかったという内容でした。やはり、どの現場でも保護者への報告は頭を抱える時もあるんだと感じました。トラブル後にケガもなく、特に引きずる様子もなければ大丈夫かな？とか子ども達もまた、全てを報告されてしまうのは窮屈になってしまうのではないかと子どもとの「お迎えで言わないで」の約束も守らなければ、子どもとの関係も崩れてしまい、「本当はどうしたい」の声を聞けることはできなくなるので難しいなと感じました。良いことは沢山伝えてあげたいと思いますが、マイナスになってしまうことはどこまで報告すべきか、日々悩みます。

グループワークでも、やはりどこまで報告をするべきか悩むという意見が多く、フレンドリーの関係を築けていれば話しやすいなど、でも全家庭の保護者とフレンドリーの関係を築くことはとても難しい。苦手な保護者とはなかなか話しにくいと感じてしまうのは指導員としてダメだという意見もあり、どの意見も共感を持てるグループワークでした。保育報告の際に悩んでしまうのは自分だけではないと少し安心できた自分と、苦手とする保護者との距離感を縮める努力もしなければならぬと改めて思うことができた時間でした。

【吉川 美里さん（なかよしクラブ 常勤専任指導員）】

特別講座 9 『コロナ禍の学童保育をめぐる情勢』

特別講座ではコロナ禍の学童保育・子どもたちの育ちと脆弱性を学びました。最初に、まだコロナ禍で収束しきれていない中、学童保育所や学校でのこれまでの制限や子どもたちの様子、置かれている現状について、色々な事例から心の裏側にあるものを考えていきました。子どもたちも指導員も多くの制限が続いてきました。子どもたちは、3年もの長い間、我慢せざるを得ないことも増え、理解しようと努力し本当によく頑張ってきたなと思います。事例の一つに、発達しょうがいのある子どもがどうしてもマスクが出来ず、ずるい！と、子どもに自粛警察的な反応があったことに対する指導員の対応に、子どもが納得しているか悩んだとありました。子ども同士の関係までもコロナの影響が出ていることの心配や、不完全燃焼のままでいいのか悩む指導員の気持ちがよく分かりました。特におやつ時間は“楽しい時間であってほしい”というのは、指導員みんなが願っていることです。安心して楽しく過ごせるにはどうしたら良いか、どの学童保育所の指導員も頭を悩ませ、試行錯誤で頑張っていることが伝わってきました。今回はコロナ対策と実践のはざままで、自分と同じようにこれでいいのかと悩んでいる指導員の声をたくさん聞くことが出来ました。コロナに対応した体制の影響で、築いてきた縦の関係性がどうしても今までのようなわけにはいかなくなりました。どの指導員も“何とかしたい！”という思いを抱きながら、葛藤に苦しんでいることが分かりました。

講師の先生から何度も繰り返し出て来た言葉に、“学童保育は子ども本来の顔を見せる場所、裸の心をそのまま出して、魂をぶつけられる場所それが学童保育所”とありました。毎日一緒に過ごしていると、魂のぶつかり合いが出来る場所だなど、指導員になってから、ふと思うことが度々あったので、この講座でのこのキーワードが一番の驚きでした。

学童保育は魂の仕事であり、その子の世界に“入り込んで内面を感じ取って気持ちを理解すること”が大切であるということでした。問題行動だけを見ず、どうしてそういう行動をするのか、そうせざるを得ない気持ちを入り込んで理解できるようにしていきたいです。指導員は揺らいでもいい、揺らぐことが成長に繋がっていくと思えました。

指導員全員の子ども理解のレンズを通して“複眼で見る”という努力、自分にゆとりを持てるようにし、かつ丁寧な保育をしていきたいと思えます。

【川原 郁美さん（風の子クラブ 常勤専任指導員）】

理論講座 4 『しょうがいのある子どもの理解をふかめともにそだちあう』

理論講座4「しょうがいのある子どもの理解をふかめともにそだちあう」を受講しました。まず初めに驚いたことがあります。特別支援学校、特別支援学級、通級による指導を受けている小学生の多さです。学童保育という子ども福祉の現場で働きながら、いわゆる発達障がいと診断される子どもや気になる子どもは多くなっているのではないかと感じていました。実際に数字でみて想像を超える人数に驚きました。

今回の講座では、障がいを理解して受け止め、障がいを持つ子どもの発達について学びそれぞれの子ども、障がいにあった支援を心がけることが必要だと強く感じました。障がい特性を学び、理解することは大切ですが、同じ障がいの診断名だからといって全員が同じ行動をとるわけでも、同じ考えをしているわけでもありません。障がい特性と、一人ひとりの子どもの性格や、子どもにある背景を理解しようとするのが子どもの本質的な理解につながっていくのだと気づきました。

また、どんな物事にもいえることですが、行動やものの捉え方は、1つとは限らないということをお忘れず、『私はこう捉えるしこう思うけど、あの子はどうなんだろう。どんなことを考えているんだろう、どう思うんだろう』と、思いをめぐらせてかかわったり、子どもが壁にぶつかったときに、子どもの目線に立って考えたり、自分が体験した同じような場面を思い返して考えてみたりして、援助の方法を探ることが必要だと学びました。

『自分ならこう、一般的にはこう、だからみんなもそうだろう』といった偏った捉え方をしないように注意して、さまざまな特性のある子どもとかかわり、ともに育っていききたいと思えます。

【西村 巧さん（つくしクラブ 常勤専任指導員）】

基礎講座 3 『子どもの権利の観点からみる学童保育の生活』

岸田内閣が発足してしばらくたつ。彼の言葉を借りて言うのなら「聞く力」。
子どもたちの言語は未発達。思考も行動も発達途上。
その中で単に「権利だから」、とただ意見を言わせておくことはそれはそれで危険。
僕ら指導員に必要なのはそれこそ子どもたちの言葉を「聞く力」。これはセンスと経験。
子どもの権利条約を今回もまた読んだ。

今回はこんな事例はどの条約に当てはまるのか、のクイズ方式。

、、、なるほど、子どもたちは様々な権利があって、守られている。

しかし、この権利条約の存在を知っている大人はどのくらいいるのだろうか？

ぼくら専門の人間でも勘違いしてやないか、条約の一つ一つを読み違えているのではないのか？

今回の指導員学校はそういった事を再度考える良い機会になったように思う。

クイズの中で「イベントは指導員がすべて決めてる」、これはどの条約にひっかかるのか、というものがあつた。はっきり言って自分自身も「子どもの権利条約」に関しては存在は知ってはいるものの内容に関してはそんなに詳しくはなく、常にこれを意識しながら仕事をしているわけでもない。しかし、子どもの意見は聞くようにしている。

イベントに関して子どもを巻き込んで会議を開き、ばらばらの意見の落としどころを見つけうまくまとめるようにしている。

そう思ったとき、「あ、自分にはセンスがあるな、」って勝手に自画自賛してみた。でも、そんな矢先、高学年の子たちと一緒に夏休みのキャンプ会議をしていたところ、ある男子の様子がおかしいことに気づき、後ほど聞いてみたら言いたいことが言えなかった、とのこと。（もちろんその後はフォローしましたが・・・）

あー、自分、まだまだダメでした。しかし、様子がおかしいことに気づけたのは「センスだな」って、やっぱり自画自賛してみる。

そんな感じでこれからも子どもたちを真ん中に僕らはその良き理解者、代弁者として子どもの置かれた状況を察知しながら保育にかかわっていきたいと思う。

いま流行りの「さん付け」論争に子どもの権利条約をあてはめながら・・・

【犬飼 杏奈さん（あそびばクラブ 非常勤指導員）】

基礎講座 1 『学童保育の役割と指導員の仕事』

保護者が、労働等で家庭にいない時に、児童を「放課後児童クラブ」(学童保育所)であずかる。子どもの状況や発達段階を踏まえて、お世話する。健全な育成を図る、いわば、第2、第3の家だと思ってほしい。指導員と保護者の信頼関係は大事！子どもの様子や気になったことなどを伝える。学校や地域の様々な社会資源との連携は大事。保護者とも連携して育成支援を行い、家庭の子育てを支援。学童保育で生活するには、様々なことがある。子どもが帰ってくる前に、指導員同士で確認しあい、情報交換する(共有する)。必要な備品などは、代用品を使うものもあるし、新しく買う物もある。清掃などは、チェックリストを使用し、指導員同士で確認。出欠確認は、子どもの口頭はうのみにしないで、保護者に電話する。子どもが、学校から帰って来たら、1人1人、顔をしっかりと見て、「おかえり」と言う。声をかける。その子の様子がいつもとは同じか、それともちがうのかを目で見る(視診)。顔を見るだけで、子どもの様子はよみとれる。すごく大事なこと！1人1人、みんなの顔をちゃんと見ることの大切さ。

【吉口 晴美さん（たけのこクラブ 非常勤指導員）】

基礎講座 1 『学童保育の役割と指導員の仕事』

学校から帰ってきた時の子どもの顔や様子から、気持ちを読み取り気づき対応できる様に保育していきたいです。指導員の仕事に携わっていく上で学童保育の役割や子どもの最善の利益を考え保育していけるよう様々な研修に参加し自己研鑽できるようにしたいです。

【島田 歩実さん（あそびばクラブ 常勤専任指導員）】

実践講座 8 『しょうがいのある子どもをふくむ生活づくり』

午後の講座では、講師の先生や事例を出してくださった方はもちろん、様々な皆さんの悩みや思いをきくことができるとてもより良い時間でした。

この講義の中で、“受容する”というお言葉がたくさん出てきました。「障がいのある子は特に、受け止めてもらえていないと、“オレなんかどうせ”という自己否定感を強くもってしまいがち。まずは私たち指導員や、一番は保護者が、障がいのことを受容する、受け入れないといけないと思う。みんなが受け入れればみんなのまなざしがいきやすい」と仰っていました。この“受容する”って簡単なことではないなと感じました。特に障がいをもつ子どもの保護者の方にとって、障がいを受け入れるということは、相当な時間や気持ちの整理、周りの支えが必要なのかなと感じます。「子育てを一緒にやっていきましょうね。辛抱強く一緒に見ていきましょうね」の気持ちを大切にしていきたいと仰っていましたが、今の私にできることは、まずはこの姿勢を大切に貫き通すことかなと感じました。

また講義の中で、『ふつうってなんだろう?』という動画を観ました。ちょっとしたことですぐにカッと怒ってしまう男の子の動画でした。もしかして障がいかもしれないけれど、でもその子は「体の中にあるおこりんぼうとうまく関われない症候群」と自分で名付け、おこりんぼうとうまく関わっていくやり方を一生懸命周りの手をかりながら、葛藤しながら試していました。「みんな誰も小さくしたいもの(すぐに怒ってしまう等)をもっているんだよね、どうしたら小さくできるのか一緒に学び合えるといいんだよね」というお言葉が、とても心に残っています。障がいがある子もない子も、みんな多かれ少なかれ、小さくしたいものをもっていること。その小さくしたいものと、どう向き合っていくか、みんなで向き合っていくようにすることが大切なのだなと学ばせて頂きました。どう向き合い、さらに周りの理解を得ながらみんなで向き合っていくかというのが今の私にとって大きな課題のひとつなので、いろいろな方のご意見ややり方をお聞きしてこれからも勉強していきます。そして“その子に合った向き合い方”を一緒に考えていけたらいいなと思いました。

【野呂 利紗さん（なかよしクラブ 非常勤指導員）】

基礎講座 2 『子どもの理解とはたらきかけ』

子どもの意思を尊重してあげるという事はすごく大事なことですというのは分かりますが、何でもいう事を聞くという事とは違います。分かっているようでその関わり合いがすごく難しく、子どもに理解してもらえるように働きかけていくにはどのようにしたらいいか、指導員の先生方とコミュニケーションをしっかりと取りながら保育していきたいと思いました。また私は高学年とのコミュニケーションを難しく思う場面が多々あり(例えば元気がない、泣いている時など)、話しかけてどうしたのか聞こうとしますが、大丈夫!と話をしてくれなかったりすることがあります。そういった場合は無理に聞き出そうとはせず落ち着くまでそっとしておくのですが、結局最後まで何があったのかは聞けなかったという事もありました。何か悩んでいるならいつでも聞くからね!と声はかけますが、子どもなりに考えて言わないのか、それともまだ私に心を開いていないから言いたくないのか、自分で解決できる事だから言わないのか...子どもがどんな事を思っているのかがやはり自分一人では分からないので、周りの先生との協力が必要なのだと感じました。常に情報の共有を心がけたいと思います。

6月5日(日)に第47回全国学童保育指導員学校が、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、オンラインで開催されました。NPO法人岡崎がくどうの会からは、指導員29名が参加しました。今回は、感想を含めたレポートを一部ではありますが、紹介させていただきました。

他の指導員のレポートは、ホームページ(<https://okazakigakudou.jimdofree.com>)に掲載されていますので、お時間のある時にお目通しください。

次回は、10月末に開催される第47回全国学童保育研究集会のレポートを掲載します。